

# 昭和戦前期におけるレジャーのかたち 福井家とレジャー革命

長尾洋子 所員／表現学部准教授

## ——はじめに

昭和初期、それまでにない旅行熱が全国を覆った。すでに開始されていた旅行関係団体の組織化、旅行専門雑誌発刊などの動きに加えて、快適で安価な移動手段の整備が進んだことがその背景にある<sup>1)</sup>。

1928年（昭和3）夏、丸ノ内ビルヂングで開催された「東京近郊遊覧地展覧会」は当時の様子を雄弁に物語っている<sup>2)</sup>。「入場者一日無慮一万人の盛況」<sup>3)</sup>と伝えられたこの展覧会は、日本旅行協会が東京鉄道局と丸ビル商店連合会の後援を受けて開催したものである。日本旅行協会は、鉄道省や日本郵船など交通関係機関をふくむ旅行関係団体の中央連絡機関であり、当時の代表的な旅行専門雑誌『旅』を刊行していた。

おもな出展者は、急速な勢いで郊外に路線をのばしつつあった電鉄会社である。東京横浜・目黒蒲田電鉄は、ピクニックに最適な洗足池や前年に開設されたばかりの綱島ラジウム温泉の宣伝に余念がない。京浜電気鉄道は大森、森ヶ崎、羽田の海水浴プールをはじめとする海浜の行楽地、玉川電気鉄道会社はテニスコートをそなえた玉川児童園の魅力を訴えた。京王電気軌道沿線では、深大寺や多摩御陵、手近な登山に適した高尾山が鮮やかな鳥瞰図に描かれた。そのほか花月園、豊島園、京王閣なども紹介された。東京市民のあいだでは、郊外電車を利用した日帰り行楽や週末旅行の機会が飛躍的に増えつつあったのである。

旅行ブームを支えた交通網の発達とはまた、沿線の宅地開発や学園誘致などにもおよんだ。都市民だけでなく、近郊住民をも巻き込みながら、生活様式全体の变化をひきおこしつつあったのである。余暇の過ごし方（レジャー）もその例外で

1) 白幡洋三郎『旅行ノススメ』中央公論新社、1996年、54-58頁。

2) 「丸ビルを彩る東京近郊遊覧地覗き」『旅』1928年8月号。

3) 前掲記事。

はない。羽田は明治末から昭和初期にかけて、東京近郊に住む人々がどのように余暇を過ごしたかの変遷を、日記を手がかりに探っている<sup>4)</sup>。郊外電車を利用した行楽や小旅行以外に注目されるのは、百貨店で買物や展覧会見物、銀ブラを楽しむ機会が、昭和に入ってからにわかに増加したことである。この時期、都市民および近郊住民の消費生活は新たな段階をむかえていた<sup>5)</sup>。

近代産業社会の発展がどのように都市と余暇文化を形成するかを記号論的視点もまじえながら実証的に研究した竹村民郎は、このような旅行ブームや消費的な娯楽の浸透を「レジャー革命」の枠組みでとらえている。

レジャー革命とは、電気と機械を応用した娯楽産業（映画、レコード、大型娯楽機械をそなえた遊園地など）の出現による余暇活動の規格化と、都市民の非労働の時間に対する意識や生活様式の類似化を指す<sup>6)</sup>。レジャー革命はマス・レジャーの成立や電鉄資本の発達などに典型的に現れ、都市計画とも連動しながら進行した。レジャーは「機械文明と産業社会のシステムが生みだしたもっとも価値のある賜物」<sup>7)</sup>であり、娯楽のあり方が資本によって操作・規定される傾向が支配的となる<sup>8)</sup>。

しかし、人々はつねに資本に対して受動的であるばかりではない。人・商品・情報の流通量の激増は、余暇の時間や空間を自由に再編成する欲求を飛躍的に増大させた<sup>9)</sup>。コミュニケーションの活発化は、さらに、資本と消費者のあいだに一種のフィードバック過程を生じさせ、レジャー革命の動力ともなったのである。

ところが、レジャー革命における享受者側の視点にたった研究は少ない<sup>10)</sup>。レジャー革命が急速に進行した昭和戦前期、人々はそれをどのように享受し、参画したのか。あるいは独自に展開させたのか。こうした問題意識の下、本稿では東京市京橋区本湊町（現中央区湊）を本拠に貸地・貸家業を営んだ福井家に注目す

4) 羽田博昭「東京近郊地域における娯楽の諸相」奥須磨子、羽田博昭編『都市と娯楽』日本経済評論社、2004年。

5) 第二次世界大戦前の東京および近郊における消費生活の発展を3段階に分けるとすれば、ここでいう「新たな段階」とは第3段階にあたる。第1段階は、勸工場、百貨店の登場によって、新しい商品で生活を満たしていく欲求が生まれた明治20年代から30年代とする。第2段階は、明治40年代から大正期にかけて、中流上層階級や台頭する新中間層の欲求をそそり、かつ満たす環境が整えられていく時期とする。この時期には、消費の主体として婦人や児童が想定されるようになり、家庭生活のモデルが示された（吉見俊哉『博覧会の政治学』中央公論社、1992年。神野由紀『趣味の誕生』勁草書房、1994年）。この傾向は震災後、さらに膨張する新中間層、あるいは郊外電車によって都市へのアクセスが向上した近郊地域の住民にまで一気に拡大する。第3段階は新しい生活様式が、より大衆的な方法と価格で広く提供されるようになった段階を指す。呉服店系百貨店の大衆化志向、東横百貨店などターミナルデパートの登場に代表される（ルイーズ・ヤング『「近代」を売り出す』バーバラ・佐藤編『日常生活の誕生』柏書房、2007年）。

6) 竹村民郎『娯楽の系譜』同文館出版、1996年、162頁。

7) 同書、162頁。

8) 同書、62-63頁。

9) 同書、133頁、166頁。

10) 羽田、前掲4)。

る。一家のレジャーの様相を明らかにし、それがどのように形成されたかを探ることによって、昭和戦前期における東京市民の生活文化と意識を浮き彫りにする一助としたい。

## 1 —— 福井家の昭和戦前期

本章では、福井家文書<sup>11)</sup>、福井家への訪問調査<sup>12)</sup>、当主福井隆之と姉の鈴木慶伊の面接調査などを手がかりに、昭和戦前期の福井家のレジャーを素描する<sup>13)</sup>。

先代久信が家督を相続したのは1917年（大正6）であった。すでに財産家の地位を築いていた福井家ではあったが、年若い当主の有能ぶりを周囲に知らしめたのは、帝都復興事業における区画整理委員への就任であろう。『復興記念区画整理委員名鑑』では、次のように紹介されている。

君は年齢漸く三十歳に達したばかりであるが、町民の信頼厚く既に町会委員として町治に幹旋せる所多大であるが、帝都復興事業計画さるゝや……衆望を負ひ二十一区委員に推挙せられ大都市の復興に新鋭の力を添へてゐる<sup>14)</sup>。

区画整理委員として活動しはじめた1925年（大正14）は、日本橋の松阪家から階子を迎え入れた年でもあった。貸地・貸家業に加え、地域の有力者と肩をならべて区画整理事業にいそしみ、自らの家庭を築いた昭和初年代は、久信の人生における充実期であるとともに、震災で痛手をこうむった福井家再生の時期でもあった。

久信は1937年（昭和12）に41歳で急逝する。が、福井家は貸地・貸家業を継続し、それまでに得た地所のほとんどを第二次世界大戦終結後まで維持した。久信の死は早すぎたが、生前の活躍と、母たけ・妻階子の努力によって、財産家としての福井家の地位も維持された。残された家族は、久信も謳歌した昭和モダニズムの先端的な都市生活をひきつづき享受することができたのである。

久信の四女慶伊氏（1933年生）によれば、昭和戦前期における福井家の一年は、次のような年中行事や余暇活動にいろどられていた。

新年には、氏神である鉄砲洲稲荷に参詣したのち、築地本願寺、水天宮、「とげぬき地蔵尊」で知られる巣鴨の高岩寺などに詣でるのを習慣とした。築地本願寺との縁は深く、毎月一回、僧侶を招き、近所の人を集めて法話会を開いた。だけが中心となつてとりしきったこの会は、宗教を媒介とした社交を活発化させ、

11) 本号掲載の塩崎論文参照。

12) 2009年（平成21）8月3日に実施。

13) 福井家および親族の構成、生没年等については、本号掲載塩崎論文の家系図参照。

14) 岩瀬治兵衛『復興記念区画整理委員名鑑』日本連合通信社、1926年、543頁。

町内における福井家の存在をアピールする機会ともなっていた。桃の節句は、5人の娘に恵まれた福井家にとって一大行事の観を呈した。武者隠しつきの2階の座敷に複数のひな壇を飾り、そこで食事をしたという。鉄砲洲稲荷神社の例大祭も重要な年中行事であった。福井家は神輿の休憩所となっていて、近所の子供には菓子や、大人には酒肴をふるまうのが恒例となっていた。

7月、夏休みに入ると同時に、女中ふたりを連れて鎌倉由比ヶ浜に家を借り、1ヶ月ほど滞在した。おもな活動は海水浴である。8月の盆には帰宅し、菩提寺である妙善寺（本願寺派。震災後、築地から現在の世田谷区北烏山に移転した）の僧侶による法要を自宅で行った。11月にはたけが中心となって報恩講を行った<sup>15)</sup>。たけ没後も階子によって受け継がれたこの行事は法要のみでなく、特別の料理を作って家族や近所にふるまう慣習をともなっていた。福井家では、普段より大ぶりに切った蓮、八頭、人参などで煮物をこしらえ、赤飯とともに折詰にして近所に配ったという<sup>16)</sup>。冬休みには、年末まで一家で熱海に避寒するのがならわしであった。

このような年中行事の合間をぬって行われたのが、寺社参詣である。階子は子供を全員連れて、浅草寺、水天宮、雑司ヶ谷の鬼子母神などに参詣していた。参詣は、近世にはすでに行楽的な要素を強くもつようになっていた。江戸では、数々の神社仏閣が境内に庭園をもうけ、祭礼を催して「名所化」をはかったり、出開帳を催したりした。また、庶民にとって江ノ島や大山への参詣は行楽も兼ねていた。近代に入ってから、行楽を兼ねた参詣は継続する<sup>17)</sup>。福井家の月参りもこの文脈において理解するのが妥当であるといえよう。

女性や子供むけの消費文化がかなり定着した時代ではあったが、女性の外出や買い物についてはモダンガールを標的とした社会的批判もおこっていた<sup>18)</sup>。階子のような、良妻賢母教育を受け、夫の家族と同居する子持ちの女性にとっては、外出するのにそれなりの名目が必要であった。そのなかにあって、寺社参詣は大切な息抜きであり、子供たちにとっても楽しい外出として記憶されている。

また、東京市内の外出といえば、階子は子供たちを連れて日本橋の実家を頻繁に訪れた。実家が営むモスリン問屋の番頭たちが子供たちの相手をしてくれたおかげで、階子は安心してくつろぐことができたのだった。雑司ヶ谷の鬼子母神や実家へは、母子揃って円タクで出かけたものであった。当時、東京市民の足はな

15) 戦後は妙善寺の僧侶による法要が行われたが、たけがとりしきっていた時代は築地本願寺の僧侶による可能性もある。

16) 1954年（昭和29）11月19日、階子が報恩講をとりしきっていた時代の献立の覚書には次のように書きつけられている（福井家文書A-②-26）。「餅、三色供物、餅米 サゝギ〔ゲ〕、白味噌汁 豆腐、ほうれんそう おしたし、がんもどき、しいたけ、ハツ頭、にんし〔じ〕ん、はす」。

17) 池上真由美『江戸庶民の信仰と行楽』同成社、2002年。鈴木勇一郎「郊外行楽地の盛衰」奥須磨子、羽田博昭編『都市と娯楽』日本経済評論社、2004年。

18) 牟田和恵『新しい女・モガ・良妻賢母』伊藤るり、坂元ひろ子、タニ・E・バーロウ編『モダンガールと植民地的近代』岩波書店、2010年。



んといっても市電であった。だが、子供が急に熱を出したときなど、近くの診療所に行くのにも人力車を利用した福井家にとっては、新しい都市交通機関として登場した円タクを日常的な家族行事に利用する経済的余裕があった。定員超過をごまかすために交番の前では頭をかがめて隠したのも、母子そろっての外出の懐かしい思い出である。

寺社参詣と親戚付き合い以外に年間を通じた余暇活動として、横浜市神奈川区北綱島町での別荘滞在がある。1933年（昭和8）、久信は東横電鉄綱島温泉停車場近くに4,587坪（約1.5ヘクタール）の土地を購入し、別荘を建てたのである（以下、綱島別荘とする）。綱島別荘での滞在は、戦況が悪化する1943年（昭和18）頃まで続けられた。

福井家文書中に散見される京都競馬倶楽部の書類や、たけや久信が長唄に熱心だったというエピソードや写真などから、これまで述べた以外のレジャーも断片的にうかがい知れる。が、本稿ではレジャー革命の観点から、熱海への避暑、鎌倉由比ヶ浜での避暑、綱島別荘での滞在に焦点をあてる。

## 2——熱海・新玉旅館のなじみ客

たけは、寒い季節になると、学校の冬休みとは別に、女中と孫をともなって、ちょくちょく熱海へ湯治に出かけたものであった。常宿としていたのは、新玉旅館である（図1）<sup>19)</sup>。慶伊の回想によれば、必ず2階の同じ部屋に滞在し、なじみの番頭がしょっちゅう顔を出して、子どもたちと遊んでくれたものであった。本章では、熱海における新玉旅館の位置づけから、福井家のレジャーの性格を探っていききたい。

新玉旅館は1887年（明治20）、浦井亀吉によってはじめられた。ちょうど国府津線が開通した年である。立地は、近世以来、大湯間欠泉の周囲に形成された湯戸<sup>20)</sup>集中地域内の「新宿」である。新玉旅館創業の翌年には、向かいに御用邸が完成した。

近世を通じて、熱海の湯戸は大湯を源泉として利用していた。大湯の引湯権は土地所属の権利だったため、近世前期から幕末までほぼ固定した湯戸集中地域が形成され

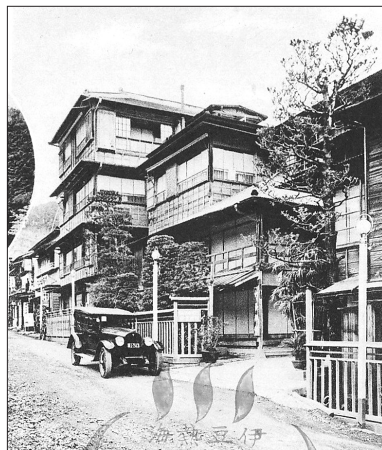


図1 新玉旅館（1934年頃発行の絵葉書の一部分）

19)『増補改訂七版旅館要録 四四年度後期』（東京人事興信所、1911年）には「新玉屋」として記載されている。

20) 内湯をもつ温泉宿。

たのである。したがって、この範囲に土地を所持し、旅館を構えることは、特権的な旅館営業者の序列に加わることを意味した<sup>21)</sup>。新玉旅館は大湯を引いており、相応の格が付与される条件は整っていたが、入湯料・宿料による6等級分類では、1897年(明治30)時点で4等に格付けされていた<sup>22)</sup>。

1886年(明治19)の「内務省熱海温泉宿泊等級浴客人員及湯銭調査表」によれば、1等<sup>23)</sup>、2等<sup>24)</sup>の高級旅館利用者は、熱海温泉旅館利用者全体の27.2%を占め、その平均泊数は10泊を越える。一方、内湯をもつ旅館では最下級の5等を利用する客は全体の37.7%、平均泊数6.1泊であった。農民を中心とした庶民の湯治もさかんで、等外の本賃宿利用者は15.3%、2.9泊という調査結果が出ている<sup>25)</sup>。

4等旅館として出発した新玉旅館は、その中間に位置する。利用者数の16.2%を占め(2等とほぼ同じ)、平均泊数4.7泊(等外に次いで短い)という集計結果からその性格を推し測るのは難しい。しかし、明治20年代以降、客層が上流階級から官吏・ブルジョワにとって代わられることを考慮すれば、過度に格式張らない路線は時代の動向を先取りしたものとして評価できる。結論を先取りしていえば、その後大きく変貌する熱海の温泉旅館事情にあって、創業時の性格を長く保持したところに、新玉旅館の特色がある。

1895年(明治28)に小田原―熱海間に開通した豆相人車鉄道は、1907年(明治40)には軽便鉄道となり、東京からのアクセスと快適性が向上した。田山花袋『旅』(1917年、博文館)から、これ以降、東京から熱海へは軽便鉄道を利用するのが標準的な経路だったことがわかる。『旅館要録 明治44年後期』<sup>26)</sup>には、「齢亀楼新玉旅館、和風二階建客間二十九、宿料応求」とある。

大正に入ると電気館(活動写真)、玉突場、カフェ、ダンスホールなどの都市的娯楽施設が進出し、中流上層階級の者たちが家族連れで滞在するようになった<sup>27)</sup>。大町桂月とともに幾度か熱海に遊んだ田中貢太郎は、1924年(大正13)に単独で訪れ、新玉旅館に滞在した。そこで偶然にも同郷の知人とはちあわせする。新聞記者和田三郎<sup>28)</sup>と元代議士の楠目玄である<sup>29)</sup>。大正時代、新玉旅館は、知識人や

21) 松田法子、大場修「『湯株』所持者の変遷にみる温泉町の近代化と空間構造の変容」『2004年度日本建築学会関東支部研究報告集』2004年、617-620頁。

22) 村山良太郎編『熱海土産保養の栞』喙汽館、1897年、615頁。

23) 富士屋、相模屋、真誠社、樋口、対孝館。

24) 坂口屋、鈴木屋、小林屋、露木。

25) 山村順次「熱海における温泉観光都市の形成と機能」『大東文化大学東洋研究所』、1970年、38-72頁、42頁。

26) 東京人事興信所、前掲書19)。

27) 下村彰男「我が国における温泉地の空間構成に関する研究(II) 近代における温泉地空間の変遷」『東大農学部演習林報告』第91号、1994年、23-114頁、30-35頁。熱海市史編纂委員会『熱海市史下巻』熱海市役所、1968年、243-244頁。

28) 板垣退助監修『自由党史』編修者の一人。

29) 田中貢太郎は、1924年(大正13)1月に滞在した熱海での顔末を書いている(田中貢太郎『静岡遊行記』青山書店、1925年)。文中では「新玉尾」とされているが、順路の記述から新玉旅館であることがわかる。

政治家も投宿する中流上層階級向けの旅館として営業しつづけていた。

1925年（大正14）に熱海線が開通して東京と直結すると、熱海には大量の旅行者が入りこんでくるようになる。「たった二時間また来ておくれ……熱海や東京の奥座敷」と熱海節<sup>30)</sup>にうたわれたように、旅行時間は劇的に短縮された。長期滞在の湯治ならともかく<sup>31)</sup>、1853年（嘉永6）生まれのたけが熱海に頻繁に出かけることが可能となるのは、この年以降とみるのが妥当であろう。

熱海線開通は熱海に本格的なマス・レジャー化をもたらした。1910年（明治43）から1923年（大正12）まで温泉利用客数は13.5万人から19.4万人の間で推移していたが、1928年（昭和3）には20万人を突破、1938年（昭和13）には48.0万人まで増加する<sup>32)</sup>。

これだけの浴客増加に対応するには、収容人数を増やさなければならない。在来旅館では高層化や大規模化がはかられた。新玉旅館の場合は、1911年（明治44）には2階建だったのを、大正期から昭和初期にかけて4階に多層化して、35室、収容定員100名を確保した（図1）。1936年（昭和11）、温泉旅館76軒中、4階建は3軒のみ。あとは2階または3階建だったから、新玉旅館は熱海屈指の高層建築だったことになる<sup>33)</sup>。

より強力に大規模化を進める旅館では、幕末までに固定した湯戸集中地域では手狭なため、郊外（とくに海岸方面）へ移転する動きがみられた。熱海の温泉旅館の立地の変遷を詳細に調査した松田・大場による一連の研究<sup>34)</sup>によれば、近世以来の老舗である伊勢屋や萬屋は早くも1877年（明治10）までには海浜方面に移転しており、1875年（明治8）創業の真誠社は1904年（明治37）までには大湯引湯権を保持したまま海岸通りへ移っている<sup>35)</sup>。明治末から湯戸集中地域にあった玉

30) 西条八十作詞、中山晋平作曲、1930年。

31) 本湊町から至近の霊岸島からは、明治20年代には東京湾汽船による定期航路が開かれており、昭和に入っても運行していた（熱海市史編纂委員会、前掲書27）、136頁）。島崎藤村『熱海土産』の主人公は、熱海線開通直前に鉄道と汽船をさまざまに乗り継いで東京と熱海を往復する。汽船に乗り合わせた客たちの中には、療養・保養目的で熱海を訪れる女性や子供が多く混じっていた様子が描かれている。ちなみに、熱海線開通後も、1927年（昭和2）発行の『温泉案内』（鉄道省編、博文館）には汽船に関する情報が掲載されている（関戸明子『近代ツーリズムと温泉』ナカニシヤ出版、2007年、146頁）。

32) 高柳友彦『地域社会における資源管理』『社会経済史学』第73巻1号、2007年、9頁。

33) 薄田崙雲『熱海を語る』（第三版）温泉旅館聚楽、1936年、326-333頁。

34) 大場修、松田法子『明治、大正期の熱海温泉における近世的『温泉町』構造の変容と継承』『日本建築学会大会学術講演梗概集』2004年、305-306頁。松田法子、大場修、前掲21）。同「昭和初期における旅館の様相と温泉町の『近代化』」『日本建築学会大会学術講演梗概集』2005年、171-172頁。同「明治～大正期の熱海における空間構造の変容と特質」『日本建築学会計画系論文集』第598号、2005年、241-247頁。同「近代熱海温泉における旅館の立地と建築類型」『日本建築学会計画系論文集』第602号、2006年、233-239頁。

35) 東京人事興信所、前掲書19）。

久も、1929年（昭和4）までには海岸へと移転した<sup>36)</sup>。さらに、大規模旅館である聚楽、常盤館、岡本、つるや<sup>37)</sup>をはじめとする昭和初期創業の温泉旅館は、海浜方面に立地する傾向にあった。

マス・レジャー化に対応した経営戦略としては、大規模化以外にも、大広間、大浴場、個室を設けるなどの工夫がなされた。新玉屋と類似の来歴を持つ鱗屋は収容定員を65名に抑えても50畳の大広間を設けている（新玉旅館は大広間なし<sup>38)</sup>）。宣伝効果をねらって、「宝石風呂」と銘打った装飾性あふれる浴室を設けた露木のような旅館もあった。新玉旅館はアールデコ調の浴室を設けて、絵葉書に写真をのせた。1934年（昭和9）以前に製作された絵葉書では「浴場」と紹介したものを、1935年（昭和10）以降は「大浴場」のキャプションをつけて宣伝したところに、当時の旅館の関心のありかと苦心がしのばれる。

装飾性は内装だけでなく、外観においても追求された。千鳥破風、楼閣、破風を重ねた入母屋屋根などで華やかさを競ったのである。

こうした震災後のマス・レジャー化、温泉旅館事情の激変のなかにあって、新玉旅館は、多層化による収容定員増をはかったとはいえ、総じて古風なままにとどまったといえるのではないか。というのも、創業以来の土地を離れなかったために、規模拡大や設備の拡充には限界があったのである。外観は簡素であるし、浴場も「宝石風呂」などに比較すれば控えめである。さらに、1936年（昭和11）時点で熱海の大半の旅館が茶代制を廃止<sup>39)</sup>していたにもかかわらず、新玉旅館は継続していた<sup>40)</sup>。

このような新玉旅館を常宿としていた福井家のレジャーも、やはり昭和戦前期にあっては古風な趣きをたたえていたといえよう。熱海線開通以後は、日帰り、一泊浴客が激増したが、福井家と新玉旅館はなじみの関係にあった。また、施設が過度に大衆化されず、海岸からやや離れた区域での長期滞在も、熱海線開通以前の慣行である。明治20年代以降、上流階級に代わって、中流上層階級が家族で熱海の温泉旅館に避暑するようになった動向を考慮すれば、福井家のレジャーは明治20年代から大正期にかけて典型的にみられたものと位置づけることができる。

マス・レジャー化を推進した熱海線の開通は、福井家にとっては、一時代前のレジャーを継承する条件となったのである。竹村民郎はレジャー革命によってもたらされる余暇活動の規格化・類似化を強調したが、福井家の事例を通じて、階級による差異化が同時に進行していたことも示される。

36) 在来有力旅館の移転には、かつては土地に付属していた大湯引湯権が土地から分離したこと、震災後には大湯が枯渇して権力構造が一変したことなどが背景にある。

37) 収容定員は聚楽150名、常盤館200名、岡本250名、つるや400名（薄田、前掲書33）。

38) 薄田、前掲書33）。

39) 大正末以来、茶代制の廃止は旅館経営近代化の課題であった（白幡、前掲書1）、56-58頁）。

40) 薄田、前掲書33）。

### 3——鎌倉「黄金時代」の継承

#### (1) 近代鎌倉の原風景

本章では、鎌倉由比ヶ浜での避暑について検討する。

よく知られるように、近代に入ってから鎌倉の発展は別荘地化に多くを負っていた。明治20年代、湘南地方では大磯をはじめとする海浜保養地が形成されつつあり、療養や健康増進のための海水浴が舶来文化として定着しはじめていた。長与専斎によって海浜保養地の価値が見出された鎌倉も、鎌倉海浜院開設とほぼ時を同じくして、高級保養地・別荘地化が進行した<sup>41)</sup>。

別荘をかまえたのは、島津忠重、毛利元昭、池田禎政・仲博、前田利為、松方正義といった華族、政財界の要人、高級官吏や軍人である。とりわけ、長谷、材木座、由比ヶ浜、坂ノ下、極楽寺といった海岸線に近い土地が一等地とされた<sup>42)</sup>。1891年（明治24）には学習院の水泳演習場が隅田川から片瀬に移り、鎌倉は都市の富裕層の避暑地、海水浴場として特権的な記号を担うようになる<sup>43)</sup>。1899年（明治32）由比ヶ浜には御用邸も設けられ、高級保養地・別荘地としての地位を確立した。

高級イメージはさらに、西洋人の存在によっても強められていた。明治20年代半ばには早くも9名の欧米人が別荘を建てており<sup>44)</sup>、海浜院ホテル<sup>45)</sup>の醸し出す近代的、西洋的な趣きをよりいっそう助長した。幕末に兵器・火薬類の取引を目的に来日した英国人モリソンは、1902年（明治35）に材木座に約10,000平方メートルの土地を購入し、本宅と貸家8軒を建て、外国人専門に貸していた<sup>46)</sup>。

明治末から大正期にかけて、海浜院ホテルの増改築によって由比ヶ浜の風景はますます西洋的なものとなった。ジョサイア・コンドルや曾禰中條建築事務所が登用されたのである。明治屋の磯野長蔵がホテルの経営権を買い取り、1916年（大正5）に新名称「鎌倉海浜ホテル」として再出発したころには、外国人観光客や亡命ロシア人などが大勢滞在していた<sup>47)</sup>。ホテルは水着、ビーチパラソル、脱衣所を提供し、由比ヶ浜は西洋の海浜保養地の観を強めていった<sup>48)</sup>。家族とと

41) 畔柳昭雄『海水浴と日本人』中央公論新社、2010年、142-143頁。原田香織『コレクション・モダン 都市文化 第54巻鎌倉と海水浴』ゆまに書房、2009年、600-601頁。

42) 島本千也『鎌倉・都市の記憶』島本千也、1988年、169-173頁。

43) 原田、前掲書41)、603頁。

44) 島本、前掲書42)、178頁。

45) 鎌倉海浜院は1888年（明治21）に改称され、海浜院ホテルとして営業されるようになった（畔柳、前掲書41)、130頁）。

46) 島本、前掲書42)、194-107頁。

47) もっともこの時期は、亡命ロシア人によって国内のホテルはどこも盛況だった。（畔柳、前掲書41)、131頁）。

48) 畔柳、前掲書41)、130-131頁。



もに材木座に住み、七里ヶ浜にバレエ・スタジオを開いたエリアナ・パブロバも、亡命ロシア人の一人である。

仏文学の翻訳で知られる朝吹登水子は、1921年（大正10）から3年間、由比ヶ浜の別荘で兄と英国人の家庭教師とともに幼少期を過ごした。当時、三越呉服店常務であった父朝吹常吉と、母磯子の意向であった。鎌倉海浜ホテル同様、ハーフトインバー様式の別荘に住んだ朝吹は、家庭教師をともなうしばしばホテルでのダンスやティーに参加した。そこは、外国人や上流階級を中心とした社交の場だったのである。朝吹にとって、ホテルは英会話の実践の場であるだけでなく、西洋式の作法や生活習慣を習得する場でもあった<sup>49)</sup>。

このように、鎌倉では「優雅さや西洋的な雰囲気をつたえた海岸風景」<sup>50)</sup> が形づくられていったのである。

## (2)「黄金時代」の到来 ― 中流上層階級の台頭

鎌倉駅は1889年（明治22）、大船駅と横須賀駅をむすぶ横須賀線の開通とともに開業し、早くから東京と通じていた。さらに1902年（明治35）には、藤沢―片瀬（現江ノ島）間に江之島電気鉄道（以下江ノ電）が開通し、徐々に延伸して1910年（明治43）に小町（現鎌倉）駅が開業した。軍事拠点を結ぶ横須賀線とは対照的に、当初から「遊覧電車」として親しまれた江ノ電は、昭和初期の旅行ブームに先行して東京と郊外を結んでいたことになる。交通網の観点だけからいえば、熱海よりも早く大衆化の条件が整ったといつてよい。

明治末、鎌倉には京浜間の官庁・銀行などへの通勤者、横須賀へ通勤する軍人なども常住するようになっていた<sup>51)</sup>。そのため、鎌倉には早くから都市の消費的な生活が持ち込まれることとなった。

消費型の都市生活は、違う形でも鎌倉に姿を現した。1909年（明治42）11月6日、1,500人あまりの乗客を乗せた客車25両、食糧・機材を積んだ貨車2両、計27両の臨時列車が鎌倉駅に到着したのである。乗客は、日本橋三越呉服店の役員、従業員、同店によって招かれた文化人らであった。彼らは人力車の横に三越のマークを貼り、寺社や海岸を遊覧した。地元の瓦版でも話題となったこの企画は、以後3年間続けられた<sup>52)</sup>。

一見奇異な、しかも大がかりなこのイベントはいったい何だったのだろうか。

当時、三越呉服店の経営の実権を握っていたのは、専務取締役日比翁助であった。1904年（明治37）に三井家から独立して株式会社化し、「デパートメントストア宣言」を出して注目を集めた人物である。

49) 朝吹登水子『私の東京物語』文化出版局、1998年、79-90頁。

50) 畔柳、前掲書41)、121頁。

51) 鎌倉市市史編さん委員会『鎌倉市史 近代通史編』吉川弘文館、1994年、176-177頁。

52) 同書、176-177頁。



独自の経営理念をもつ日比は、独自の余暇観をももちあわせていた。いわく、「〔従業員の〕大なる活動には、やがて大なる休息を要する、大なる慰安を要する」<sup>53)</sup>。日本では商人に休日の習慣はない。かねてから「一日商売を全く休み、店員一同、同時同所で同一の歡樂」を与えたいものだと考えていたのである。広告的な意味をもたせるのであれば、東京市中で慰安会を開催すべきだが、「休息の時にまで、自分の身体を広告にする程に、さもしい心事をもつには忍びない」ため、郊外で気分を変えて遊ぶことに決めたのだという。鎌倉を選んだのは、風景、歴史的感興、交通の便のよさにもまして、私淑する源頼朝ゆかりの地だからである<sup>54)</sup>。

日比は「学俗協同」<sup>55)</sup>を提唱して、新しい商品の開発や懸賞図案選定や文芸懸賞の審査に新聞・雑誌記者、学者、美術家、音楽家らの協力をあおいだ。1905年(明治38)には、こうした社外の知識人・文化人が定期的に研究成果を発表し、社員と議論を交わす「流行会」を組織した<sup>56)</sup>。鎌倉に三越関係者が大挙して訪れた中に混じっていた文化人とは、おもに流行会のメンバーであった。現に、その中心人物であった巖谷小波、井上剣花坊、半井桃水、坪井正五郎、高島平三郎などの名が慰安会の記録に見られる<sup>57)</sup>。

三越一行が鎌倉を訪れたのは、日比翁助と、「今日は帝劇、明日は三越」のコピーで知られる浜田四郎が精力的に流行会の基盤をつくりあげようとした時期にあたる<sup>58)</sup>。慰安の目的で開催されたこの企画は、「学俗協同」の精神を実践する研修旅行の様相をも呈した。プログラム中、運動競技については西洋スポーツ普及の第一人者であった教育家の坪井玄道の指導を受けている。第3回慰安会では、創設まもない三越少年音楽隊が余興として歌劇を上演するなど<sup>59)</sup>、たいへんな力の注ぎようであった<sup>60)</sup>。

慰安会の実施には、地元の協力も欠かせなかった。会場の由比ヶ浜には櫓や仮設舞台、休憩所を設ける大がかりな準備が進められ、役場や警察が協力した。老

53) 日比翁助「何故に全店員慰安会を開きし歟」三越呉服店編『鎌倉と三越』、日比翁助、1922年、155頁。(原田、前掲書41)に復刻。ページは原田の復刻版による。)

54) 同書、156-157頁。

55) 「学俗協同」とは、もともとは後藤新平が政策立案・実行に際して各界の知識人を集めて自らのプレーンとしたやり方を指している。

56) 神野、前掲書5)、51-52頁。流行会の初期のメンバーには、巖谷小波、石橋思案、塚塚麗水など、新聞、雑誌記者が多数含まれていた。1908年(明治41)以降、人類学者の坪井正五郎、国文学者の佐々醒雪、歴史小説家の塚原洪祐、美学者の菅原教造、児童心理学者の高島平三郎などが入会した。

57) 三越呉服店編、前掲書53)。

58) 神野は、流行会の軌跡を次の3期に分けている。第1期は結成から1908年(明治41)秋の三越新館落成まで、第2期は同年11月から1914年(大正3)9月三越本店新館落成まで、第3期は本店新館が開店した1914年10月から1917年(大正6)10月までである(神野、前掲書5)。

59) 日本で初めて歌劇が上演されたのは、第3回慰安会が開催された1911年(明治44)10月、同年春に開場したばかりの帝国劇場であった。慰安会は第一義的には店員向けといいながら、最先端の都市文化をとりいれたイベントだったのである。背景は当時図案部に所属していた杉浦非水が担当した。

60) 三越呉服店編、前掲書53)。

舗の三橋旅館は、来賓休憩用の別荘を提供したばかりでなく、当日のみ発行する新聞『三越と鎌倉』のための仮設印刷所となった。模擬店給仕係には地元の女性を採用し、満艦飾の漁船を浮かべる趣向は漁師を雇い入れることによって実現した。東京から専用の臨時列車を仕立てて訪れた1,500名（第3回では1,700人）の店員・来賓のほかに、当日は付近の住民が大勢訪れ、会場入り口付近では慰安会開催を聞きつけた人々がにわか仕立ての模擬店を出すなど、さながら縁日の賑わいであった<sup>61)</sup>。

日比としては、広告効果よりも慰安を優先させたのであったが、色とりどりの旗と三越印を掲げての行動は、東京においても、鎌倉においても、三越呉服店をアピールする効果を発揮した。読売新聞、東京朝日新聞、万朝報、報知新聞など多くの新聞によって慰安会がとりあげられたのである。鎌倉住民は、一小売業者というよりも、都市がまるごと移ってきたようなイベントに深く関わることによって、当時三越の顧客であった中流上層階級の生活文化を知る機会を得た。

この時期、貸家すなわち「一時的静養又は避暑する人のために建てられた、貸別荘」は増加の一途をたどり、明治末から大正初期にかけての別荘数は460戸から480戸に達した<sup>62)</sup>。別荘を所有するほどの財力はないが、ひと夏の賃貸契約はいとわない層が急増したのである。

従来、鎌倉の海岸は私設海水浴場や別荘客の個人専用海水浴場で占められていた<sup>63)</sup>。しかし、海水浴客の急増によって組織的な対応をせまられるようになった町役場は、1910年（明治43）に公設脱衣所を開設し、青年団などが海水浴場の運営管理に参画することになった。1915年（大正4）には、由比ヶ浜、材木座、坂ノ下が正式に町営海水浴場となった。

鎌倉が徐々に上流階級だけのものではなくなった経緯は、海浜博覧会の開催によってもうかがわれる。

海浜博覧会は1910年（明治43）ごろ、報知新聞社主催によってはじめて開かれた<sup>64)</sup>。当初は鶴屋松屋呉服店、三越呉服店が出張し、避暑客や地元の人々は流行の粋を集めた憧れの商品を前に胸をときめかせた。夜はよしず張の余興場で大神楽や天勝一座の奇術が行われ、テントではジンタによる宣伝で集まってきた客相手に、活動写真も上映されていた<sup>65)</sup>。

多くの女性の姿もあった。百貨店は夏の企画商品として縞や格子、水玉模様な

61) 同書。

62) 大橋良平『現在の鎌倉』通友社、1912年、45頁（1977年村田書店により復刻）。『増補鎌倉の海』編集委員会『増補鎌倉の海』鎌倉市海水浴場運営委員会、1983年、179頁。

63) 同書、23-24頁。

64) 鎌倉市『市制施行三十周年記念図説鎌倉回顧』鎌倉市、1969年、217頁。海浜博覧会は1925年（大正14）より、青年団主催、報知新聞社後援で行われるようになった。

小坂藤若「鎌倉ひいき」『鎌倉』第1巻4号、鎌倉右文社、1926年、232-233頁も参照。

65) 小坂、前掲書64）、232-233頁。『増補鎌倉の海』編集委員会、前掲書62）、150-151頁。

どのカラフルな水着を売り出すようになった<sup>66)</sup>。由比ヶ浜では主婦の友社、婦人画報社、クラブ白粉で有名な中山太陽堂などが休憩所を出店した<sup>67)</sup>。モダンで高価な浜辺の装いは、ブルジョワ階級であること、別荘持ちであることを誇示する格好の手段となったのである。

こうした企業休憩所の進出は、鎌倉町による誘致運動の成果でもあった。家族連れをあてこんだ明治製菓、森永製菓、グリコなどのキャンパスストアやカルピス<sup>68)</sup>が夏の家を出した。きわめつけは銀座4丁目にあったキャバレー美松の誘致であった。300人ものお抱えダンサーが入れ替わり立ち替わりで鎌倉に来るたび、新しい客がついてくるというので、大きな集客効果を発揮した<sup>69)</sup>。

こうして、1923年（大正12）には「夏季の避暑客も四月か五月に予約しておかねば、貸家も貸間もないという状態」となり、鎌倉は「黄金時代」をむかえたのであった<sup>70)</sup>。

### (3)「海の銀座」― マス・レジャー化

関東大震災によって鎌倉は壊滅的被害を受け、海浜保養地・別荘地としての性格は大きく損なわれる。その後の鎌倉を特徴づけるのは、一貫して住宅地化の動きであった。

しかし、海水浴場の人気は続き、町役場や青年団が中心となって運営体制が整えられていく。1926年（大正15）には、由比ヶ浜、坂の下、極楽寺、材木座の町営更衣所に掃除と見張のための係がおかれた。由比ヶ浜はもっとも混雑するため、船と船頭もおいて警戒にあたったという。さらに、由比ヶ浜と材木座の更衣所では当番の役場職員が警官とともに風紀取締、危険防止、浴客への便宜供与といった業務についた。青年団も更衣所内に事務所を設け、危険監視と浴客への便宜供与に協力した<sup>71)</sup>。

1930年（昭和5）、横須賀線の電化にともない、運行時間の短縮、列車本数の増加で日帰りの客が大幅に増加した<sup>72)</sup>。1934年（昭和9）7月11日、東京朝日新聞夕刊は鎌倉の海水浴場開きを次のように伝えている。

---

66) 畔柳、前掲書41)、47頁。

67) 「増補鎌倉の海」編集委員会、前掲書62)、154頁。

68) 1919年（大正8）に発売された乳酸飲料カルピスが、アイスクリーム、ヨーグルト、牛乳、バター、キャラメル等とならんでいかに新しい食の嗜好（乳製品の栄養価に対する認識、甘さと西洋趣味の大衆化）に合致していたかについては、竹村民郎『大正文化』三元社、2004年、74-76頁を参照。カルピスは味覚だけでなく、その軽やかなネーミングと天の川を抽象化したモダンな包装デザイン、「初恋の味」というコピーに代表される広告センスでモダン志向の人々の支持を集めた。

69) 「増補鎌倉の海」編集委員会、前掲書62)、154頁。

70) 鎌倉同人会『鎌倉同人会五十年史』鎌倉同人会、1965年、75頁。

71) 小坂、前掲書64)、233-234頁。

72) 鎌倉市、前掲書64)、219頁。

「海の銀座」、鎌倉の海水浴場は十日開かれた。百数十軒の海の喫茶店は軒を並べて青い海の背景に映画のセットのやうに瀟洒だ、白、青、黄、赤の色彩の水着につゝまれた生白い肌で海辺を散歩する海の夏に躍る青春の男女の数も大分多くなった……「散歩は鎌倉の海へ」と銀ブラ人に海の魅惑をポスターで呼びかけて〔ゐ〕る

通常、「〇〇銀座」といえば、商店街が銀座の繁栄にあやかって名のるもので、銀座が小売商店街として成功した明治中期以降に出始めたと言われる。それが急増したのは、銀座が流行の発信地としての地位を獲得したのみならず、喫茶店やダンスホール、映画館、劇場など、サラリーマンや家族連れも利用できる社交・遊興施設をそなえた明るい繁華街＝「新しい近代都市の消費空間」として生まれ変わった昭和初期のことであった<sup>73)</sup>。「散歩は鎌倉の海へ」の呼びかけは、「青い海の背景に映画のセットのやうに瀟洒」な喫茶店群を昭和モダニズムの都市景観になぞらえ、鎌倉でも銀ブラを、と誘っているにひとしい。

こうして、都市の日常性が直接鎌倉にも持ち込まれるようになると、日帰りや一泊で鎌倉を訪れる傾向が一般的となった。熱海線開通以降の熱海の海浜地域にもみられたマス・レジャー化が一気に進んだのである。昭和初期の新聞紙上では、海水浴場開きと週末の人出がクローズアップされるようになり、震災前のような別荘の需要の高さは影をひそめた<sup>74)</sup>。「黄金時代」は過去のものとなったのである。

#### (4) 由比ヶ浜における福井家の避暑

7月、子供たちが夏休みに入ると同時に、女中ふたりを連れて由比ヶ浜の別荘に1ヶ月ほど滞在、おもな活動は海水浴、8月の盆にあわせて本湊町に帰宅。これが昭和戦前期における福井家の夏の過ごし方であった。

避暑地としての鎌倉の歴史と照らし合わせると、こうした過ごし方は、ひと夏の別荘賃貸契約はいとわない層が急増した明治40年代から、「黄金時代」といわれた震災前に成立したと考えられる。「黄金時代」は、外国人の存在、由比ヶ浜の海浜ホテル、材木座のモリソン屋敷などによって西洋的な雰囲気をつたえた近代鎌倉の原風景を下敷に形成されたものである。また、流行の発信源となり、巧みな広告戦略を通じて消費社会への移行を牽引した呉服店系百貨店が、鎌倉の海辺に娯楽の消費空間をはじめて現出させた時期でもあった。

福井家がいつ、鎌倉での避暑を恒例とし始めたのかは定かではない。そのスタイルが震災前に成立したことをふまえれば、新助の代に開始された可能性もない

73) 初田亨『繁華街の近代』東京大学出版会、2004年、47頁、206-216頁。

74) たとえば東京朝日新聞1928年6月12日記事「この夏は何所へ？ 手近の海岸避暑地貸家、貸間、貸別荘しらべ」では「約束済みは今の所少い」と報じられている。

わけではない。しかし、1897年（明治30）に生まれた末子の久信が十代半ばになってから、家族の行事としてこのような避暑を恒例化したとは考えにくい。むしろ、慶応義塾大学理財科に学び、帝都復興期に不動産経営者として成長した久信が、中流上層階級としての意識と行動様式を身につけたことによって、鎌倉「黄金時代」の避暑のスタイルが実践されたと考えたほうがよさそうである。

久信の子供たちが通う鉄砲洲小学校の生徒たちのほとんどにとって、このようなレジャーは縁遠かったと思われる。というのも、隅田川がよい遊び場となっていたからである<sup>75)</sup>。また、昭和初期には佃の渡しによって、すぐに海水浴場に行くことができたのである。見世物小屋なども出たいへんにぎやかだったという。また、佃には区の教育会が運営するプールもあり、夏休みというところに毎日通った生徒も多かったようだ<sup>76)</sup>。

そもそも大半の都市労働者にとって、家族そろって一ヶ月も生活や仕事の場を離れるのは不可能である。週末は近郊の海水浴場へ足をのばすことがあるとしても、夏休みの平日、子供たちは生活圏の範囲で自分たちの遊びを作っていかなければならなかったのである。

週末海水浴客とは一線を画す態度からみてとれる久信の階級意識は、福井家の家庭生活、子供の教育、レジャー全般にみられたようである。住居についても、いずれはよりステイタスの高い麹町に移したいと考えていた<sup>77)</sup>。子供たちの遊び相手についても口を出し、休みには家族で過ごすことを好んだ。

そのような久信が、郊外開発の進みつつあった東京横浜電鉄（以下東横電鉄）沿線に土地を購入し、別荘を所有したのも不思議ではない。次に、年間を通して家族でよく遊びにいったという綱島別荘について述べる。

#### 4——綱島別荘に遊ぶ——「桃の名所」の成立と福井家のレジャー空間

福井家文書中、昭和戦前期のレジャー革命の動向にてらして注目されるのは、東横電鉄綱島温泉停車場近くの土地購入関係文書、当地の別荘で撮影された家族写真である<sup>78)</sup>。本章では、年間を通じて久信・階子夫婦と子供たちがたびたび訪れたという綱島別荘の所有は、どのような状況において実現されたのか、またどのように使用されたかを明らかにする。

75) 中央区教育委員会編『中央区の昔を語る（三）』中央区教育委員会、1990年、9頁。1923年（大正12）に生まれ、鉄砲洲小学校を卒業した男性の回想によれば、子供時代、水のきれいだった隅田川でよく泳いだものだという。舟の後ろにぶらさがったり、小さな舟を借りたりしたのも遊びのうちであった。

76) 記念誌実行委員会編『鉄砲洲百年』、記念誌実行委員会、1977年、77頁。

77) 鈴木慶伊との談話による。

78) 本誌040頁、塩崎論文、図5a、図5b。



表1 福井久信（隆之）による北綱島町字北前耕地の土地売買

土 地 宝 典 (1932年)						購 入 (1933年)	売 却※ (1946年)	備 考
番地	地目	面積	賃貸価格 (単位：銭)	等級	所有者	売 主	買 主	
1221番	田	3畝3歩、外畦畔3歩	2800	84	遠藤種三郎	遠藤種三郎	岡本定吉	
1222番	田	3畝4歩、外畦畔4歩	2800	84	遠藤種三郎	遠藤種三郎	岡本定吉	
1223番	畑	6畝24歩、外畦畔7歩	2200	81	遠藤種三郎	遠藤種三郎	岡本定吉	
1224番	畑	3畝22歩	2200	81	遠藤種三郎	遠藤種三郎	佐藤佐一	
1225番	畑	5畝20歩	2200	81	遠藤種三郎	遠藤種三郎	佐藤佐一	
1226番	畑	4畝13歩	2200	81	遠藤種三郎	遠藤種三郎	中村芳太郎・清太郎	
1227番	宅地	14坪	18	29	遠藤種三郎	遠藤種三郎	佐藤佐一	
1228番	畑	4畝8歩	2200	81	遠藤種三郎	遠藤種三郎	中村芳太郎・清太郎	
1229番イ号	萱野	4畝14歩	260	52	遠藤種三郎	遠藤種三郎	(記載なし)	購入時、売買契約書に記載された地目は「原野」
1229番ロ号	畑	1畝4歩	1000	72	遠藤種三郎	遠藤種三郎	中村芳太郎・清太郎	
1230番	萱野	9歩	260	52	遠藤種三郎	遠藤種三郎	佐藤佐一	購入時、売買契約書に記載された地目は「原野」
1231番	畑	6畝19歩	2200	81	遠藤種三郎	遠藤種三郎	中村芳太郎・清太郎	
1232番	墓地	28歩	-	-	岡本仲蔵	(記載無し)	(記載なし)	1935年(昭和10)12月岡本定次郎よりら譲渡、翌年4月に山林に地目変更
1233番	萱野	2畝	260	52	遠藤種三郎	遠藤種三郎	(記載なし)	
1234番	畑	5畝23歩	1000	72	遠藤種三郎	遠藤種三郎	中村芳太郎・清太郎	
1235番	畑	4畝15歩	2200	81	遠藤種三郎	遠藤種三郎	中村芳太郎・清太郎	購入時、売買契約書に記載された地目は「原野」
1236番	宅地	261坪	18	29	小原亀吉	(記載無し)	中村芳太郎・清太郎	1934年(昭和9)頃入手(推定)
1237番	藪	1畝8歩	300	54	遠藤種三郎	遠藤種三郎	佐藤佐一	
1238番	畑	6畝1歩、外畦畔9歩	2200	81	遠藤種三郎	遠藤種三郎	中村芳太郎・清太郎	
1239番	田	3畝2歩、外7歩	2800	84	遠藤種三郎	遠藤種三郎	中村芳太郎・清太郎	
1240番	田	3畝17歩	2800	84	遠藤種三郎	遠藤種三郎	中村芳太郎・清太郎	購入時、売買契約書に記載された地目は「山林」
1286番ノ1	山	1反9畝3歩	300	54	遠藤種三郎	遠藤種三郎	佐藤佐一	購入時、売買契約書に記載された地目は「山林」
1289番	山	6反2畝14歩	300	54	遠藤種三郎	遠藤種三郎	中村芳太郎・清太郎	購入時、売買契約書に記載された地目は「山林」

※北綱島町別所耕地1236番地の家屋も中村芳太郎・清太郎に売却したことになる（番地からいって、北前耕地の誤記と思われる）。  
横浜土地協会監修「横浜市土地宝典 神奈川区之部」1932年、福井家文書E-③-2「土地売買契約書」、同E-③-3「土地登記済報告」より作成。

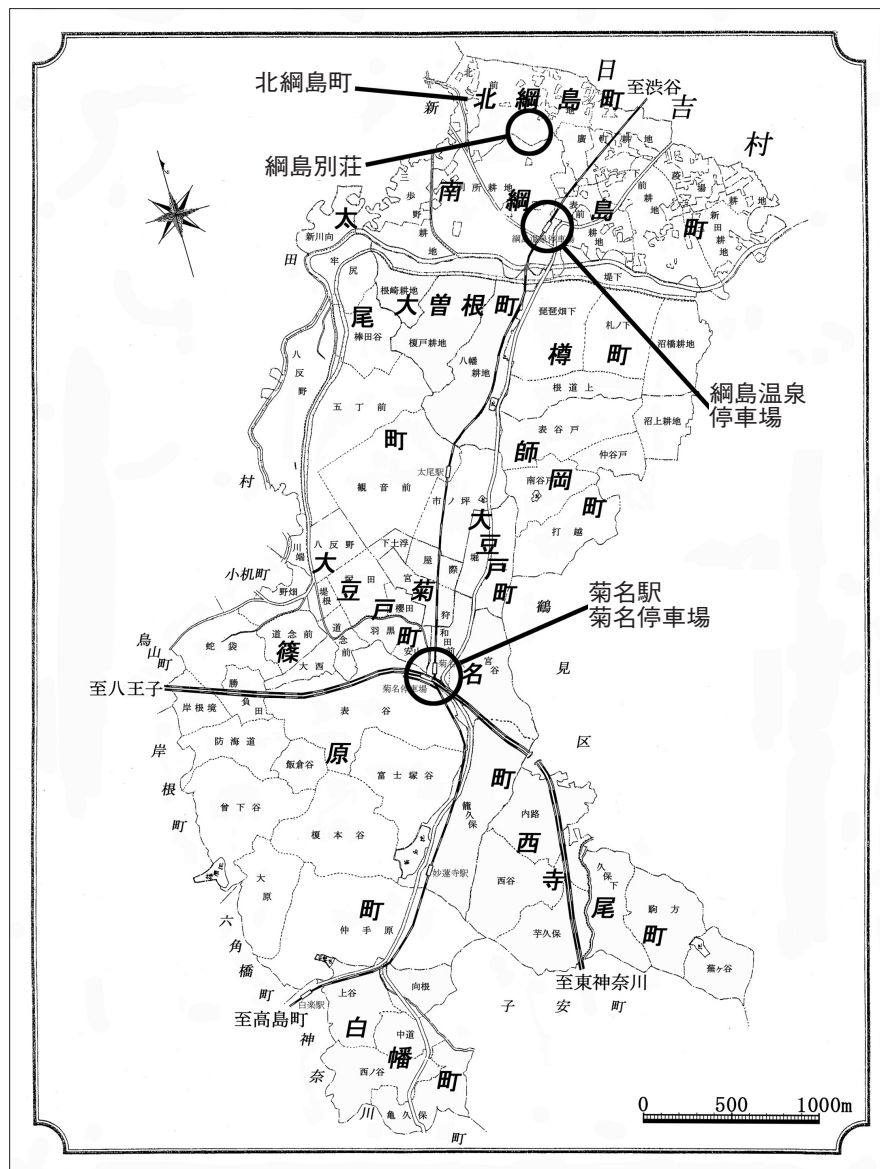
(1) 東京横浜電鉄による沿線開発

福井久信は、1933年（昭和 8 ） 5 月、横浜市神奈川区北綱島町字北前耕地1221番以下21筆の土地、合計4,587坪（約1.5ヘクタール）を17,500円で購入した（表1「購入（1933年）」欄参照）<sup>79)</sup>。この地は都市近郊の農村地帯であったが、横浜と東京の都市化により、大正末から昭和初期にかけて大きく変貌した。そこで、まず周辺ではどのような動きがあったのかを概観してみたい。

北綱島町は、1889年（明治22）町村制施行から1927年（昭和 2 ） 3 月まで存続した橋樹郡大綱村大字北綱島にあたる。1927年（昭和 2 ） 4 月に大綱村は横浜市に編入されて大字北綱島は北綱島町となり、同年さらに神奈川区に編入されて横浜

79) 福井文書E - ③ - 2「土地売買契約書」。





市神奈川区北綱島町となった。旧大綱村の範囲でその位置を示せば、図2のようになる。

同年、神奈川線（丸子多摩川―神奈川間）が開通した。この区間の中程に位置する綱島温泉駅は、1927年（昭和2）に渋谷線（渋谷―丸子玉川間）が開通することによって東京と連絡した<sup>80)</sup>。

さらに、2駅先の菊名駅では横浜線が交叉している。生糸流通の幹線であった横浜鉄道株式会社線（現横浜線）は、すでに1908年（明治41）に東神奈川―八王子間で営業を開始し、1917年（大正6）に鉄道院に買収された。菊名駅の開業は1926年（大正15）である。

このように、旧大綱村周辺は、大正末から昭和初期にかけて一気に2路線が開通し、横浜、東京との連絡が容易になったのである。震災後、横浜市の地価は、中央部が震災前とほぼ同様、居留地・山手は下落傾向にあるのに対し、中心を離れるほど高い上昇率を示した。『横浜土地時報』等によれば、平均で2倍、ときには5倍の地価上昇を示す場合もあり、とりわけ鉄道沿線では高騰が激しかった<sup>81)</sup>。1927年（昭和2）に横浜市に編入された北綱島町は、まさしく地価高騰の最前線にあった。

東横電鉄の五島慶太は、関西で郊外開発と多角化戦略を主軸にした私鉄経営で成功した阪神急行電鉄の小林一三のビジネスモデルを模範に、積極的に沿線開発を行った<sup>82)</sup>。とりわけ、乗客誘致のために郊外住宅地建設と学校誘致をすすめ、電灯電力供給や娯楽施設等の住民サービスもあわせて行う手法が最大の特徴であった。神奈川線開通後は田園都市会社と共同で日吉台の土地分譲を開始し、その後、単独で小杉、元住吉、綱島温泉、太尾、菊名、新神奈川で沿線住宅地の分譲を行った。大学予科の移転先を探していた慶応義塾大学の日吉台誘致工作を開始したのも同時期である<sup>83)</sup>。さらに1929年（昭和4）には貸地無料紹介や住宅資金貸付業務にも着手し、高収益をあげた<sup>84)</sup>。

旧大綱村および周辺地区では、1924年（大正13）から、鉄道敷設・宅地造成用地の買収が開始され、翌年には地主側交渉委員と東横電鉄側用地係との間で買収標準価格が決定された。坪価格では、横浜市街地と隣接する篠原の田畑に10円台の価格がつき、最高となった。綱島<sup>85)</sup>は田4円、畑5円60銭の値がついた<sup>86)</sup>。

80) 東横電鉄が全通（渋谷・桜木町間）するのは1932年（昭和7）。

81) 大豆生田稔「都市化と農地問題」、横浜近代史研究会、横浜資料館編『横浜の近代』日本経済評論社、1997年、135-136頁。

82) 松本和明「娯楽・百貨店事業と渋谷の開発」奥須磨子、羽田博昭編『都市と娯楽』日本経済評論社、2004年。

83) 慶応義塾大学において日吉移転が正式に決定したのは1928年（昭和3）10月16日である。日吉校舎建設第一期工事がほぼ完成して授業が開始されたのは、1934年（昭和9）であった。（港北区郷土史編さん刊行委員会『港北区史』港北区郷土史編さん刊行委員会、1986年、421-424頁）

84) 東京急行電鉄社史編纂事務局編『東京急行電鉄50年史』東京急行電鉄、1973年、99頁。松本、前掲82)、68-69頁。

85) 北綱島町と南綱島町をあわせた区域。

86) 大豆生田、前掲81)、140頁。大曾根、太尾、樽方面では田3円、畑4円、菊名では田4円50銭、畑5円50銭であった。

綱島温泉停車場設置に対する地主側の期待は大きく、地元の有力者であった飯田助夫、竹生源蔵、池谷鏡之助、小泉武雄らが発起人となり、鉄道用地と停車場周辺の商業用地の確保にのりだした。すでに開始していた耕地整理運動を促進させ、約1万坪の埋立工事を行ったのである。その範囲は、県道と綱島温泉駅東部の三間道路（綱島街道）、北部の三間道路によって囲まれたほぼ三角形の地帯である（図3）。東横電鉄はこの用地を坪あたり4円で購入した。周辺の水田も埋立造成のうえ、東横電鉄に売却された<sup>87)</sup>。

このように、東横線沿線では大規模かつ地価高騰をとまなう土地売買が行われ、土地ブローカーも発生する事態となった<sup>88)</sup>。

綱島温泉住宅地が売りだされたのは、1927年（昭和2）3月のことである。翌月には、東横電鉄直営のラジウム温泉が開設された。3,372平方メートルの敷地に300平方メートルの浴場をそなえた娯楽施設である。当時の鉄道大臣小川平吉宛に提出された兼業認可申請書によれば、その目的は明確に「旅客誘致及土地開発

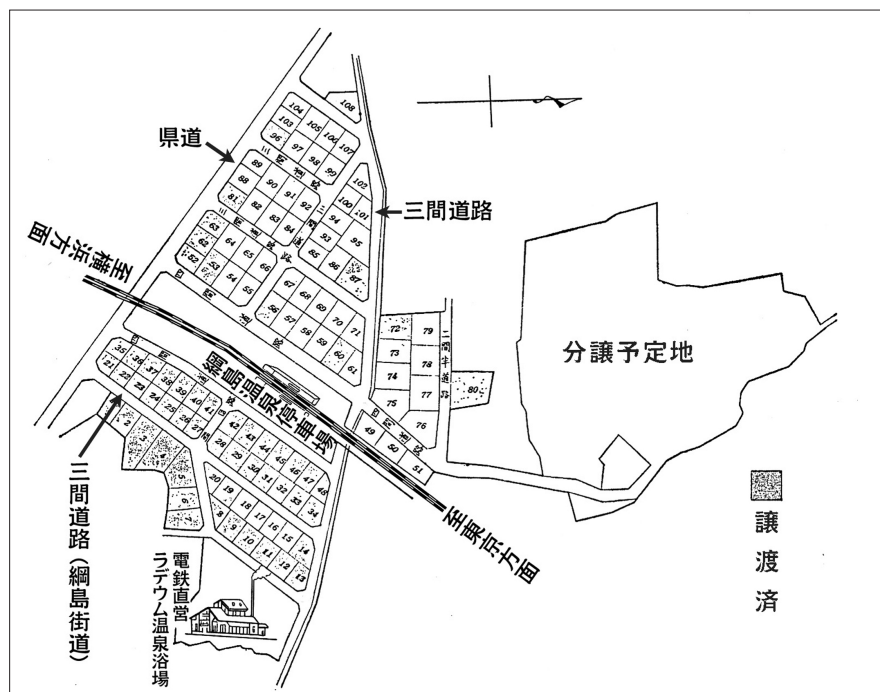


図3 綱島分譲住宅地平面図（『目黒蒲田東京横浜電鉄沿線分譲地案内』a 港北区郷土史編さん刊行委員会『港北区史』港北区郷土史編さん刊行委員会、1986年、386頁より作成。）

87) 港北区郷土誌編さん刊行委員会、前掲書83)、384-385頁。

88) 大豆生田、前掲81)、142頁。

89) 港北区郷土誌編さん刊行委員会、前掲書83)、428-430頁。

ノ一助」とすることであった。入浴料は20銭であったが、綱島温泉停車場までの往復乗車券所持者は無料であった<sup>90)</sup>。

「沿線分譲地概要」(『目黒蒲田東京横浜電鉄沿線分譲地案内』a)<sup>90)</sup>は、次のように宣伝している。

綱島温泉駅前一带の土地にして停車場を地区の中央に設け各区画共道路下水共完備せり。地区北部は丘陵にして南部は鶴見川の清流に面し冬暖く夏涼しく風景絶佳なり尚この地一带桃の名所にして関東一の称あり地区内に当社経営の天然湧出ラジウム温泉大浴場あり浴客絶へず商業地としても亦有望の地なり。地区に隣接して桃雲台公園あり老松点在して雅趣に富み付近一带風光明媚特に桃花満開の季節は最も佳なり。……綱島温泉駅より横浜方面へ約十五分、東京方面へ約三十分なり<sup>91)</sup>。(下線部筆者)

都市機能がじゅうぶんに整っている点、地形によって作りだされる快適な気候と風景のよさ、桃の名所であること、商業地としても適している点<sup>92)</sup>、東京、横浜両都市へのアクセシビリティにすぐれている点などが強調されている。

当時、東横電鉄が構想していた沿線開発は、広告用パンフレットの表紙にも象徴的に表されている(図4)。多摩川がゆったりと流れ、富士山を遠望する春爛漫の田園で、耳かきの婦人が幼い娘と花摘みを楽しんでいる。一带に点在するのは、白い壁に橙色の切妻屋根が特徴的な文化住宅である。花木にかこまれ、適度の間隔をもって配置された家々は、田園都市の理想を具現している。その田園をまっすぐ横切るのが電車である。車体には水色に光る窓が並び、パンタグラフを掲げ、清潔感・軽快感にあふれている。



図4 「目黒蒲田東京横浜電鉄沿線案内鳥瞰図」の表紙  
(吉田初三郎画、1926年。『復刻版・目黒蒲田東京横浜電鉄沿線案内鳥瞰図』横浜市発展記念館、2008年より転載。原資料は横浜市発展記念館所蔵。)

90) 目黒蒲田東京横浜電鉄田園都市部は複数の『目黒蒲田東京横浜電鉄沿線分譲地案内』を刊行しており、それぞれの刊行年は不明である。本稿では、港北区郷土史編さん刊行委員会、前掲書80)に掲載されているものをa、同名ながら内容の異なるもの(横浜市立図書館蔵)をbとする。aは北部丘陵地の宅地(図3で「分譲予定地」とされている)売り出し前、bは売り出し後に刊行されている。

91) 港北区郷土史編さん刊行委員会、前掲書83)、430頁。

92) 『目黒蒲田東京横浜電鉄沿線分譲地案内』bの「土地譲渡契約要旨」によれば、分譲地は商店地と住宅地にあらかじめ区別されており、住宅地の場合は住宅用、商店地については契約時に合意した営業店舗に使用すること(住宅兼用可)を義務付けている。

このような広告デザインにおいては、婦人の耳かきや日傘、幼女の幅広リボンやエプロンがモダンな趣味をもつ中流家庭の記号となっている。また、彼女たちはこの郊外生活の恩恵をもっともよく享受する主体として想定されていたことがわかる。

宣伝にのせられて実際に綱島温泉を訪れた客は、電鉄直営温泉浴場の建物に夢の我が家を投影することになろう（図5）。急勾配の大きな切妻屋根をもつ、ハーフティンバー様式を取り入れた洋風建築は、規模こそ違え、さながら文化住宅である<sup>93)</sup>。全体に縦のラインを強調し、ポーチ上部には装飾性をもたせ、前庭の南国風植栽は高級感を醸し出している。浴後には食堂で洋食、喫茶を楽しむこともできた。モダンな浴場の周囲



図5 東横電鉄直営温泉場の外観（1930年撮影。岩田忠利『わが町の昔と今』『とうよこ沿線』編集室、2000年、31頁より転載。）

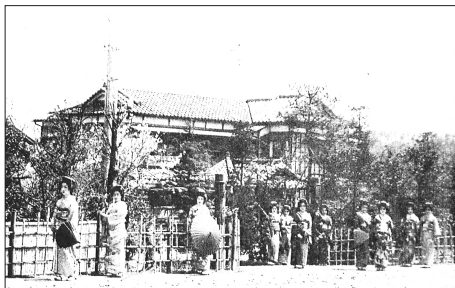


図6 綱島温泉駅付近の割烹旅館と芸者衆（1932年撮影。岩田忠利『わが町の昔と今』『とうよこ沿線』編集室、2000年、32頁より転載。）

には、日本風の料理屋や旅館も立ち並び（図6）、1935年（昭和10）前後、とりわけ花見時には行楽客で大変なにぎわいを見せるようになった。

以上のように、震災後、東横電鉄沿線は土地の市場化が大規模におこり、さらに広告や開発の形態によって示された郊外生活やレジャーのかたちが、具体的に追求される現場となったのである。

## （2）福井久信による土地取得の経緯とその背景

福井久信が購入した土地を『横浜市土地宝典神奈川県之部』（横浜土地協会監修、1932年。以下『土地宝典』とする。）上に表したのが図7である（網掛部分）。さらに、1934年（昭和9）6月には、久信が代理人となって、同所1236番の建物滅失登記申請がなされていることから、この頃に1236番の土地も取得したと推測される<sup>94)</sup>。1935年（昭和10）12月には、法律上売買の対象とはならない墳墓地（1232番、28歩）

93) 現に平和記念東京博覧会（1922）で展示された文化住宅にはこれと酷似した外観のものもある。（高橋仁編『文化村住宅設計図説』、鈴木書店、1922年（『叢書近代日本のデザイン大正編第21巻』ゆまに書房、2009年に復刻）。

94) 福井文書C・⑧・5・1「建物滅失登記申請書」。1236番地の購入を直接示す文書はないが、隆之に相続された不動産目録（福井文書C・⑫・5「土地建物所有権取得登記申請書」）の中に当該番地の記載がある。

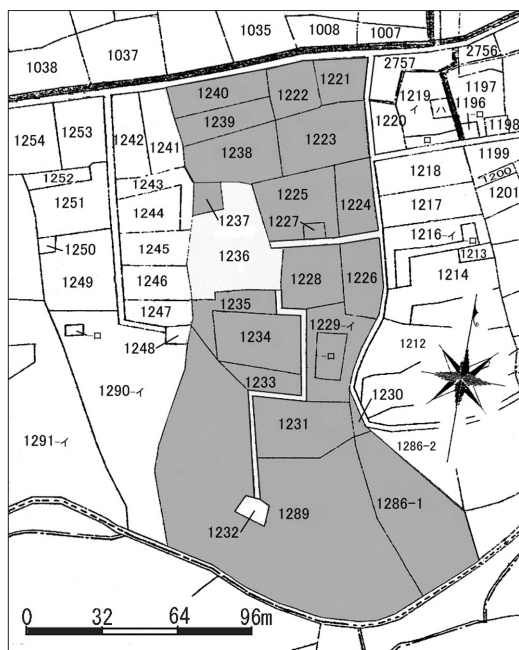


を所有者の岡本定次郎から譲り受け、翌年4月に山林へと地目変更している<sup>95)</sup>。これらの土地は1937年(昭和12)の久信没後、嗣子隆之に相続された<sup>96)</sup>。1946年(昭和21)には、岡本定吉、中村芳太郎、中村清太郎、佐藤佐一に売却された(表1「売却(1946年)」欄参照)。

ところで、1933年(昭和8)といえば、東横電鉄による土地買収の動きはすでに落ち着いていたが、沿線では耕地整理組合による宅地化が進行中であった<sup>97)</sup>。旧大綱村の範囲では、1930年(昭和5)篠原地区に「地頭山土地区画整理組合」が設立され、山林・田・畑等を整理して6.4ヘクタールの宅地造成を行った。これは、横浜市が助成していた市街地周辺宅地開発促進事業の一環であり、1938年(昭和13)頃には中流向けの住宅地が完成した<sup>98)</sup>。福井久信の土地購入は、地元地主による宅地化が積極的にすすめられていた時期になされたものであった。

それでは、彼は地元地主から直接購入したのだろうか。1932年(昭和7)の『土地宝典』によれば、1933年(昭和8)に購入された土地のすべては遠藤種三郎の名義である(表1)。しかも、土地売買契約書、受領証等<sup>99)</sup>によれば、遠藤種三郎の住所は東京市品川区北品川となっている。受領書とともに綴られた付帯文書から、遠藤種三郎が1932年(昭和7)7月にこれらの土地を抵当に羽田銀行から借入れをしていることが知られる。福井久信は、遠藤種三郎が転売した土地を入手したわけである<sup>100)</sup>。

図7 福井久信が取得した土地



横浜土地協会監修『横浜市土地宝典 神奈川区之部』1932年をもとに作成。

95) 福井家文書 C-⑨-17「贈与証書」およびE-③-6「登記簿謄本」。

96) 福井文書C-⑫-5「土地建物所有権取得登記申請書」。

97) 八田恵子「恐慌期都市近郊の農村問題」横浜近代史研究会、横浜資料館編『横浜近郊の近代史』日本経済評論社、2002年、202-204頁。

98) 同書、203頁。港北区郷土史編さん刊行委員会、前掲書83)、43頁。大豆生田、前掲81)、144頁。

99) 福井家文書E-③。

100) 1236番の家屋については、1931年(昭和6)2月に岡本素助(北綱島町)から小原亀吉(東京府荏原郡荏原町)に売り渡された記録が残っている。(福井家文書C-⑧-5)



それでは、久信が1935年（昭和10）までに入手した土地は、もともと誰が所有していたのか。もっとも可能性が高いのは、1232番地の墓地所有者であった岡本仲蔵あるいは家督相続人岡本定次郎である。図7をよくみると、墓地へつながる小道が1236番から出ている。また、1236番から道路に出るには1225、1224、1228、1226番地の間を通して行く必要がある。福井久信が購入した土地の西側1242、1246～1253、1290番地は岡本姓の所有者である。したがって、1236番地（宅地）と1232番地（墓地）を囲む一帯は、元来、岡本一族の土地だったと考えられる。墓地を含むまとまった面積の田畑・山林を手放すには岡本家固有の事情が関係していたとみられるが、沿線地域全体でおこっていた宅地化の動きに即したものと判断できる。

さらに、この時期には、横浜、東京、川崎近郊に特有の農村事情が存在したことも念頭におく必要がある。大豆生田によれば、この地域は大消費地に近接するため、農産物市場の急速な拡大を見込んで、1910年代から野菜・果樹栽培が活発化した<sup>101)</sup>。並行して、農業労働力が都市に流出し、小作地返還による農業生産の衰退や小作人を中心とした脱農現象が起こりはじめていた。また、すでにみた東横電鉄による土地買収、組織的な沿線開発による農地の潰廃が進み、宅地化の旨味を知った地主が小作人から土地をとりあげ、売却や転貸などを通じて小作料収入よりも有利な土地活用を企図するようになった。

ところが、1930年代にはいと恐慌のため、農外就労機会が激減し、事態は一変して小作地需要が高騰した。地主－小作関係にも変化が生じ、1920年代に小作人の能動的な離農による小作地返還が多かったのとは逆に、1930年代には地主が土地経営的観点から小作地返還要求を行うようになる。電鉄資本が牽引した沿線開発の影響だけではなく、恐慌下に耕作地主が共通に画策した「宅地化による収入増」への動きによって、土地の市場化が促されたのである。宅地化をにらんだ地主の土地とりあげは、小作人の激しい抵抗を招き、小作人は補償として作離料を要求しはじめるようにすらなった。

このように、福井久信による綱島の土地購入は、農村不況が深刻化し、地主－小作関係が緊張の度を増していた時期に行われた。

### (3)「桃ノ木」を読み解く

福井久信が遠藤種三郎と交わした土地売買契約書<sup>102)</sup>には、5つの条件が課されている。当時の農村の状況にかんがみて、とくに注目すべきは「山林ノ立木ハ有形ノ儘トシ桃ノ木ハ除クコト」の一文である（下線部筆者）。「沿線分譲地概要」で「この地一帯桃の名所にして関東一の称あり」と宣伝された、ロマンティック

101) 大豆生田、前掲81)。

102) 福井家文書E - ③ - 2。

な郊外風景の要素たる桃を、なぜ、「除クコト」としたのだろうか。

この条文をどのように解釈するかについては、考慮しなければならない点はいくつかある。まず、本売買契約において「桃ノ木」が言及される背景をさぐってみたい。

そもそも綱島の桃は、大消費地むけの有望な商品として栽培が始まったものである。神奈川県は明治40年代からその全国シェアを伸ばし、大正半ば以降、岡山とならんで桃の二大産地となった。県内主要産地であった旧橋樹郡のなかでも上位を占めていたのが旧大綱村であった<sup>103)</sup>。

1910年（明治43）には桃生産者による「綱島果樹園芸組合」が発足する。組合員数は1913年（大正2）に44人であったのが、1925年（大正14）には93名に増加、作付面積は約9町歩から約24町歩にまで拡大した。1916年（大正5）頃から東京神田市場への組合共同出荷が開始される。組合では、運搬途中の傷みを少なくするためバネ付き荷馬車を用いたほか、箱の敷紙にも気をくばり、ポスターによる宣伝、問屋との定期的懇談を通じた消費者の嗜好の研究などに力を注いだ。地域ブランドの確立を目指したわけである。昭和に入ってからこの路線は追求され、「綱島桃」という商標やポスターを用いた宣伝活動、化粧箱やパラフィン紙の使用による見栄え重視の販売促進活動によって、東京の果物市場の要求によく応えた<sup>104)</sup>。

「沿線分譲地概要」で「風景絶佳」「桃の名所」と喧伝されていたのは、じつは中流以上の東京市民にむけた高級桃の産地の風景だったのである<sup>105)</sup>。

不況深化の時期（1931～1934）には、神奈川県下でも小作争議が発生した。土地取り上げを原因とする、作離料および桃の木の賠償をめぐる争いが多い。その動きは北綱島町からほど近い高津町でも顕著であった。地主が宅地化するために農地に土盛りをしたり、土地を取り上げたりしようとすると、小作人が対抗して賠償の対象となる桃の木を植え付ける行為に出た<sup>106)</sup>。綱島の農家において、桃は有望な商品作物だっただけに<sup>107)</sup>、恐慌期には小作人の「武器」、すなわち土地取り上げに対抗する手段となったのである。反対に、桃の木の除去は地主側にとって、農地の土盛り同様、宅地化の意図の表明であった。

次に、「桃ノ木ハ除クコト」の強制力をどの程度に見積もるかの問題がある。

103) 百瀬敏夫「桃産地形成と園芸組合」横浜近代史研究会、横浜資料館編『横浜近郊の近代史』日本経済評論社、2002年、164頁、167頁。

104) 同書、175-177頁。こうした実績にもかかわらず、1938年（昭和13）の鶴見川洪水によって打撃を受けたのを機に、綱島での桃栽培は衰退していった。

105) 隣の大倉山駅近くに、東横電鉄が乗客誘致のために4.3ヘクタールの土地を買収して梅の木を500本植えて公園として整備したのとは事情が異なる（港北区郷土史編さん刊行委員会、前掲書83）、503頁）。

106) 八田、前掲書97）、206頁。

107) たとえば大正末には、桃の上作は一反当たり田の一町歩の収入にも匹敵し、凶作でも田の一反歩相当の収入を見込めた（百瀬、前掲書103）、174頁）。

少なく見積もれば、山林の立木を有形のまま維持するとしても、桃の木はその原則にはあてはまらない、つまり除去してもよい、と解釈できる。逆に、最大限に見積もれば、山林の立木については有形のままに維持しなくてはならない、そして桃の木については除去しなくてはならない、と解釈することが可能である。福井久信と遠藤種三郎との間に交わされた売買契約ではどちらが意図されたのか、現時点では情報が不足している。

さらに、「桃ノ木」に関する条項が遠藤種三郎と福井久信の売買契約の時点ではじめて盛り込まれたものなのか、それとも遠藤種三郎が岡本仲蔵（または定次郎）から購入したさいにすでに盛り込まれていたのを引き継いだものなのかという点も検討する必要があるだろう。

残念ながら、福井家文書には遠藤種三郎と岡本仲蔵（または定次郎）の間で交わされた契約書は見当たらない。もし遠藤種三郎が購入したさいにすでに盛り込まれていたのだとすれば、当時、この地域で生じていた地主－小作人関係の緊張を直接反映した条項であると判断できる。『土地宝典』を瞥見するかぎり、岡本一族は綱島温泉停車場周辺の耕地整理に積極的に関与した飯田、竹生、池谷、小泉ほどの大規模な地主ではなかった。それだけに、恐慌による収入減を解決する選択肢が限られていたといえるだろう。「桃ノ木」に関する条項は、岡本仲蔵（または定次郎）の宅地化の意思を表明したものと解釈できる。

もし、福井久信購入時にはじめて盛り込まれたとすれば、異なった解釈が可能であろう。宅地利用を意図する福井久信が、農地化を予防するために設けた条件と考えられるのである。貸地貸家業を営む福井久信にとって、機会が訪れれば有望な住宅地として提供できるような条件をあらかじめ整えておくことは重要である。たんに家族用の別荘を建てるためだけであれば、「桃ノ木」に言及しなくてもすんだかもしれない。しかし、墓地の取得や地目変更の手続き（墓地から山林へ）を購入後間もなく進めたことをあわせて考えると、賃貸や転売の可能性も視野に入れて設けた条件であると解釈できるのである。

以上のように、桃の木の除去に関する条項については、それが売買契約に盛り込まれた背景から、宅地化への意図の表明であることが推測される。それがもとの地主であった岡本仲蔵（または定次郎）の意思なのか、それとも福井久信の意思なのか、判断は難しい。しかし、墓地の取得や地目変更の手続きを速やかに行った福井久信の行動から、（もともと岡本の意図を引き継いだものだったとしても）久信の意思が反映された条文と考えることが妥当であろう。

以上のように、福井久信による別荘用地取得は複雑な背景をもっていた。東横電鉄沿線の開発、近郊農村固有の地主－小作関係、急激な土地の市場化などが福井家のような東京在住の貸地・貸家業者の参入を可能にしたのである。

土地取得の経緯をたどる過程で、「桃」は少なくとも二重の意味で重要であることが明らかになった。綱島における「桃」は、第一義的には中流以上の東京市

民にむけて栽培された商品作物であった。それが、東横電鉄の宣伝活動においては田園風景の構成要素となり、ロマンティックな郊外生活やレジャーの記号ともなった。ただし、福井久信はそのような記号を無垢のものとして受け止めたわけではなかった。宅地化や貸地・転売の妨げとなりかねない「桃ノ木」に関する条項が売買契約に盛り込まれていたことは、資本を投じる立場にあった福井久信のシビアな態度を示唆している。

#### (4) 綱島別荘における家族の休日

福井一家は、別荘として、建坪46坪の木造草葺平家を構えた<sup>108)</sup>。久信の娘たちの背後には、桃の木が写っている(図8)。別荘を利用するのは、もっぱら久信・階子夫妻と子供たちであり、たけが同行することはなかった。敷地内には管理人をおいていた。本宅から綱島温泉停車場までは市電および東横線を用い、駅から別荘までの起伏にとんだ1キロメートル弱の道程は徒歩であった。別荘は、図3中「分譲予定地」とされた駅北部の丘陵地よりもさらに北西に位置するため、駅の東側に位置する電鉄直営温泉場や周辺の商業施設を通ることなく、別荘に向かうことができた。

いや、そればかりではない。久信・階子夫妻は、温泉場や南部の大綱橋方面、鶴見川沿いの花見の名所には行かぬよう、子供たちに厳しく言い含めていたというのである<sup>109)</sup>。子供たちは、敷地の中だけで遊ぶことを許されており、近所との付き合いはなかった。南側の小高い丘にはさまざまな果樹が植えられていたため、四季折々の花や実を楽しむことができた。

質商、貸地・貸家業を営む福井家の系譜を考慮すれば、近郊の風光明媚の地に妻や子の遊ぶ場を設ける行為は、近世町人が郊外に「寮」と呼びならわした別宅を設けた風俗の延長と解釈できる。田園都市の魅力や文化住宅が喧伝されていたにもかかわらず、日本家屋を建てて使用人を常住させたのは、久信が無意識のうちにひきずっていた近世の生活文化の名残といえるだろう。

とはいえ、綱島別荘での過ごし方の基調をなしていたのは、モダン生活である。写真には、水着姿でくつろぐ久信、三輪車、おもち



図8 別荘敷地への入口

108) 1937年(昭和12)、福井隆之相続時。(福井家文書C-⑫-5「土地建物所有権取得登記申請書」)

109) 慶伊氏との談話による。

の自動車、ブランコが写っている<sup>110)</sup>。ここには、「秋葉の従姉妹たち」、つまり京城帝大や九州帝大等で教授を務めた秋葉隆に嫁いだ蔵子（階子の姉）の子女たちも時折遊びに訪れた。鎌倉や軽井沢での上流階級のサロンとはいかないまでも、都会の喧騒や大衆的娯楽から隔離された環境の中で、洗練された社交をもとうとしたと解釈できる。

この別荘は、久信の死後も階子と子供たちの休日のレジャーの場であった。

階子は新興ブルジョワジーとして明治末から大正にかけて活躍した松阪晴吉を父にもち、裕福な娘時代を過ごした<sup>111)</sup>。久信なき後、この土地は階子にとって日本橋の実家とも、本湊町とも異なった、特別な意味をもったのではないだろうか。

1925年（大正14）に久信のもとに嫁いだ階子にとって、震災後の東京が経験した生活様式の変化は、結婚生活、そして次々に生まれる子どもたちとの家族生活に直接の影響をおよぼした。綱島における土地購入は、久信・階子夫婦の代になって進展した郊外開発を背景としており、郊外電車を利用して休日を夫婦と子どもで過ごすという行動様式は、モダン生活の典型である。その意味では、福井家は資本が推進するレジャー革命の享受者として位置づけられよう。

しかし、久信は綱島温泉駅周辺の行楽地・住宅地から離れた土地に、家族だけの楽園ともいえるような別荘を所有した。東横電鉄が提供した沿線分譲住宅地、あるいは地元地主が想定した郊外住宅地よりも、はるかにぜいたくでプライベートなレジャー空間を得たのである。階子が寡婦となってからも頻繁に綱島の別荘を訪れたのは、土地の管理のためもあったであろうが、久信の忘れ形見である7人の子どもたちのつつがない成育と、家族のプライベートな空間で築かれた絆を確かめ続けるためではなかったか。

このように、福井家の綱島別荘滞在は、レジャー革命の推進力である郊外開発を前提条件として、近世的な「寮」の要素とモダン生活とが同居した、固有のレジャーの相貌をもつことになった。それは、商家の慣習の名残をとどめる生活様式と、新興ブルジョアの意識の両方をあわせもつ福井久信・階子夫妻が、電鉄資本によって示された「桃の名所」綱島を部分的に受けとめつつ、みずからの人生の行路において意味づける過程でかたちづくられたのであった。

## 5——レジャー革命のなかの福井家

昭和戦前期における福井家の余暇活動を、時間的には年中行事にそって、空間的には東京市内、熱海、鎌倉、綱島にわたって見てきた。

自宅や東京市内の余暇活動においては、伝統的な年中行事や、親族や地域の人

110) 本誌040頁、塩崎論文、図5a、図5bを参照。

111) 詳細は本号掲載の塩崎論文参照。



びととの付き合い、宗教を媒介とした社交が中心であった。そこにレジャー革命の要素をみるとしたら、新たな都市交通網としての円タクの積極的な利用であろう。

熱海でのたけの湯治、家族そろっての避寒は、交通網の発達によって実現したものである。ただし、熱海がマス・レジャー化した昭和戦前期にあって、福井家はかなり古風な過ごし方をしていた。なじみの老舗旅館に宿泊するという、明治20年代から震災前にかけての中流上層階級のレジャーのかたちを踏襲していたのである。

鎌倉由比ヶ浜での避暑についても同様である。本格的に大衆化する前にさかんとなった中流上層階級の別荘滞在を昭和戦前期に実践していた。

その点、三越の鎌倉進出は興味深い。昭和初期におこった「海の銀座」現象は、都市の日常性を由比ヶ浜に直接持ち込み、福井家の人々をもその風景の中に投げ込んだ。しかし、福井家のまなごしはむしろ、みずから震災前の「黄金時代」の中にとらえていた。三越との関係でいえば、「学俗協同」「今日は帝劇、明日は三越」が山の手文化の大きな推進力となっていた時代に自らを投影した。とすれば、久信の代の福井家を大きく特徴づけていたのは、本拠が下町であっても、生活様式においては山の手風であろうとする自負である。

したがって、綱島別荘の所有は重要な意味をもっていた。綱島での過ごし方は、一見、東横電鉄がふりまいた田園都市の宣伝文句にのせられているかにみえる。そもそも電鉄による沿線開発がすすむ地域に土地を購入すること自体、資本によって操作されるレジャー革命にからめとられているかのように映る。

しかし、実態は単純ではなかった。久信は電鉄の分譲住宅地を購入することはせず、温泉場や旅館・商店街を積極的に回避した。郊外住宅地は通勤の容易さが売りであったが、福井家が綱島に土地を求めたのは通勤の便からではない。建物も文化住宅ではなく、日本家屋であった。久信は、恐慌下、近郊農村における社会関係（地主－小作人、地主－外部資本）が多分に緊張をはらむ状況のなかで、貸地・貸家業者として独自の判断をしたうえで、この地に土地と別荘を所有したのだった。

綱島での過ごし方は、久信・階子夫妻と子供たちではほぼ完結してしまう、きわめて私的なものであった。久信にとって、綱島別荘は、家族形成、階級意識、エリート貸地・貸家業者としてのアイデンティティ確立に資するものであった。また、階子にとっては、実家の過去の繁栄を、現在において代理する存在でもあった。

こうした心性は、レジャー革命のコミュニケーションの回路にのることはない。福井家にみられたような、ごく私的な空間を所有し、コントロールしたいという欲求は、レジャーの枠を超え、近代家族のあり方にもおよぶものである。そこでは夫婦の信頼、愛情にあふれた家庭による子供の養育が重視される。四季折々の



花に囲まれ、子供たちが敷地内を元気に駆け回り、自転車を駆る綱島別荘は、近代家族の実験場であった。

とはいえ、綱島別荘の事例で示されたモダン生活の様相は純粹なものではなかった。寺社参詣と行楽の融合、信仰を媒介とした社交生活、近世の「寮」の風俗といった異質な要素も含んでいたからである。福井家の家業にかかわる不動産運用の関心も存在した。さらに、福井家の余暇活動は、明治中期から大正にかけて（すなわち本格的なマス・レジャー化以前の）中流上層階級によっておこなわれていた形態を踏襲していた。久信の父新助は、明治30年代にはすでに頭角を現していたのだから、その時点で中流上層階級にふさわしい余暇活動に参入していたとしても不思議ではない。ヴェブレンのいう「顕示的閑暇」<sup>112)</sup>である。こうしたレジャー観は、久信の代でさらに追求され、本論文であつかったレジャー革命の側面（大量輸送交通網の発達、大衆向け行楽地の整備、郊外開発など）は、顕示的閑暇をより十全に実践する機能をはたしたのである。

昭和戦前期における福井家のレジャーの様相と意識は以上のとおりである。一般的にみれば、竹村が論じたように、産業社会のシステムと資本の力がレジャーの領域に革命的なうねりをもたらしていることがみてとれる<sup>113)</sup>。しかし、福井家の事例を通じて、レジャーの享受者たる東京一市民が、みずから固有のレジャーをかたちづくった実態も明らかになった。その過程においては、余暇活動の主体がもつ階級意識、近郊農村を舞台とした資本主義の浸透、家族観の変容、親密圏をめぐる問題なども関連していることが浮かび上がってきた。東京市民の生活文化と意識を浮き彫りにするには、これらの関連領域にさらにふみこんだ検討が必要となろう。今後の課題としたい。

付記：福井家文書の判読に際しては鈴木勉氏にたいへんお世話になった。記して謝意を表したい。

[ながお ようこ]

112) 生存に必要な消費や生産を目的とせず、社会的威信を示すために、マナーの洗練、趣味、娯楽などのために積極的に時間を費やす生活様式（ヴェブレン、ソースティン『有閑階級の理論』高哲男訳、筑摩書房、1998年）。

113) 竹村、前掲書6）。